

現実論

——デカルトの「真」とフッサールの「信」——

権 安理 (コミュニティ政策学科教員)

I. はじめに

本当にやりたいと思うことをやって良い!——大学に入学すると、このようなことを言われる。だがこれこそが、学生を悩ます大人の主張でもある。本当にやりたいことは簡単にはみつからない。よって学生は (かつての私のように)、それを探すのを止めてしまう。あるいは、「この〇〇は本当に自分の好きなこと・人か、向いていること・人か」(〇〇には勉強、サークル、部活、就活時の志望業界、友人や恋人……が入る) と悩み続けることになる。

本当=真実の探求は困難である。このエッセイでは、そんな学生に、本当=真実に関する哲学の異なる二つの考え=方法を示してみたい。

II. 疑問——哲学は現実に役立つ?

だが、なぜ哲学なのか。私の専門は公共哲学、社会哲学であるが、学生に次のように質問されることがある。どうして哲学 (なんか) をやろうと思ったのですか? 要は「哲学は実生活に役立つのか、応用できるのか」ということが疑問なのだ。実学なら分かるし、文学なら趣味に近いと解することもできる。だが哲学は、実生活・人生や社会、つまりは「現実」には役に立たない非現実的な学問に見えるのだろう。この点に関連するが、現代哲学の巨匠であるハイデガー (1889 ~ 1976) は次のように言っている。

われわれ (哲学者) は普通のこと、毎日きまりきっている尋常平凡なことを超えて問う。ニーチェはかつて言っている。…中略…「哲学者とは、いつも異常なことを体験し、見、聞き、怪しみ、希望し、夢見る人間である……」と。(入門: 30) [括弧内引用者]

ハイデガーは、哲学が「決して事物をやさしくするものではなく、むしろ難しくするばかりである」とも述べている (入門: 28)。それは、「尋常平凡なこと」とは異質な次元で考える、夢のような学問というわけだ。ハイデガーにも学生にも全く

異論はない。いや、正確に言えば異論は全くなかった。だが近年、こう思うようになってきた。哲学は少なくともその方法においては、「現実」に意外と応用できる。確かにそれは一見すると、理屈をこねて物事を難しく考えているだけに感じるかもしれないが……。

Ⅲ. 現実の真偽——デカルト

1. VR——「リアルに目の前に迫りくる！」

ところで現実と言えば、Virtual Reality、すなわちVRが普及して久しい。「人工現実感」や「仮想現実」と訳されている。Googleを装着すれば、“現実のような非現実”の体験ができるというわけだ。ゲームからスポーツ観戦、バンジージャンプ体験に至るまで広く導入されている。USJでは、2021年の9月から、人気アニメ「鬼滅の刃」とコラボしたVRジェットコースターが登場した。「360度のVR映像×重力の融合により、呼吸や血鬼術、その息遣いまで、リアルに目の前に迫りくる！」(USJ, HP) [強調は引用者]。

既にVRは、アスリートの練習や医学生の体験学習にも使われている。いずれは、それが作り出された“現実”であることに気づかない場面が出てくるかもしれない。「人が飛び出して危ない！——いやVRです」というように。あるいは、今このエッセイを読んでいるあなたの体験それ自体がVRかもしれない。

もちろん読者は、「VRかもしれない」という懐疑をあくまで方法的なものとして理解するであろう。「本当はそうでない」と知っているが、あえて「そうかもしれない」と言っているにすぎない、と。だが今ここで、このエッセイを読んでいるこの現実が、非現実ではないと言い切ることはできるだろうか。

2. デカルトの夢——これもまたリアルである！

ある17世紀の哲学者は、この問題について既に考えていた。「我思うゆえに我あり」で有名なデカルト(1596～1650)である。もちろん、デカルトはVRについて論じたわけではないが、それが持ち得る問題については考察の対象にしていたと言える。例えばこうだ。今このエッセイを読んでいるあなたがいる。読みながら、デカルトがVRを論じるなどおかしいと思ったそのとき、目が覚めるかもしれない。気がつくとベッドの中、夢を見ていたのである。授業やアルバイトに遅刻しないよう急がねばならない現実=真理が重くのしかかってくる。

そうであるならば、次のような疑問が生じることになる。寝坊してしまったという現実もまた夢かもしれない。夢の中でそれが夢だと分かっていることもあるが、大抵はそうではない。突然目覚めて、現実ではなかったと悟るのだ。デカルトは次のように言っている。

夜の眠りの中で、いかにしばしば私は、ふだんどおり、自分がここにいるとか、上衣を着ているとか、炉ばたに坐っているとか、信じることであろう。実際は、着物を脱いで床の中で横になっているのに。(省察：239)

夢＝非現実と現実の区別は簡単ではない。蛇に見えたものが実は紐だったという程度の勘違いならよくあるだろう。デカルトはここから始めて、あらゆることの真偽を疑ってみた。かつては天動説が真理であったし、私の中学時代は「部活中の水飲みは悪」であった。絶対的真理などないように感じられる。その極論が、「現実だと思っているこの世界それ自体」に対する懐疑なのだ。あなたは、今このエッセイを読んでいる現実が夢＝非現実ではないと証明できるだろうか。頬をつねると痛いとしても、夢の中でも同様だろう。

私が、デカルトの「懐疑」を知ったのは学部生のときである。それ以来、この“現実”が現実であることを証明できないかと随分考えたものだった。あなたには証明できるだろうか。

Ⅳ. 現実への信——フッサール

1. フッサールの現実——やはりリアルである！

結局、私はこの問いに結論を下すことはできないと思うに至った¹⁾。なぜかと言えば、現実の真偽を決定しようとしている自分自身が、その現実の内部にいるからだ。小説の登場人物が、「自分が活躍する世界が小説であること」を証明するようなものである。小説内の出来事、例えば殺人事件ならば、その真相＝真理に、登場人物＝シャーロック・ホームズやコナンが辿り着くことは可能かもしれない。だが、彼らが活躍する舞台がそもそも現実＝ノンフィクションではなく、小説＝フィクションであることを証明するのは無理だろう。それが出来るのは小説の“外”の存在者、例えば読者や作者だけではなからうか。

(正しいか否かはともかく) このように思うに至ってから、デカルトの問題に対する私の関心は薄れていった。というよりも正確に言えば、忘れてしまった。だがしばらく経って、次のように言う哲学者の言葉を見たとき、デカルトの問題をありありと思い出した。

世界は、目覚めつつ、つねに何らかのしかたで実践的な関心をいただいている主体としてのわれわれにとって、たまたまあるときに与えられるというのではなく、あらゆる現実的および可能的实践の普遍野として、地平として、眼前に与えられている。生とは、たえず世界確信の中に生きるということなのである。(危機：512)

フッサール (1859～1938) の言葉である。ここには、デカルト問題の刷新＝リ
ニューアルがある。その言葉は難解だが、このエッセイの文脈に合わせて“超訳”
すれば次のようになる。すなわち……現実とは、それが夢であろうがなかろうが、我々
にとって、いつの間にか現実として存在している。蛇が紐だったり、現実のはずが
結局は夢だったりする、どんでん返しまで含めた色々な出来事が起きる舞台として、
いつでも「リアルに目の前に迫りくる！」のだ。生きるということには、“現実”が
現実であると無意識的に「信じる」が含まれている。

2. 「真」から「信」へ——二つの方法

我々は、今このエッセイを読んでいる“現実”が現実であると信じ込んでいるが、
それは夢かもしれない。ここでデカルトは、現実と非現実をどうしたら区別できる
のかと考えた。つまりは、その「真偽」を問題にした。だがフッサールは違う。

夢であろうとなかろうと、我々はそれが“現実”であると信じている。疑いの余
地があったとしても、普段はその現実をそれとして受け入れつつ生きている。逆に
言えば、いつでもリアリティを伴ってそこにある人生の舞台を、我々は現実と呼ん
でいるのだ。そのような現実を無意識的に受容しながら、我々は様々な選択をし続
けている。夢が現実のようにリアルならば、現実も夢のようにリアルだからだろう。

そうであるとするならば、問うべきなのは現実が「真であるか否か」ではなく、
むしろなぜ我々がそれを現実だと「信じるのか」ではなかろうか。既に受け入れて
しまっている現実をあえて問題にして、どうして我々はそれを現実であると信じて
いるのかを改めて考えてみようというわけだ²⁰。

フッサールの刷新が分っただろうか。「真」から「信」への発想の転換である。
このエッセイの冒頭で、ハイデガーが、哲学は「尋常平凡なことを超えて問う」と
言っていたことを思い起こそう。その問い方には、少なくとも二種類——「真」を
問うのか、「信」を問うのか——がある。

V. 現実への応用——哲学は現実に役に立つ？

では、この二種類の問いをどう生かせるのか。現実に役立てる、応用することは
できるのか。結論から言えば、何にも生かせるし、色々なことに応用できる。

例を挙げよう。「ある状況下で採ったある政策は、本当に正しかったのか否かを
検証する」or「本当に正しかったか否かはともかく、なぜ多くの人が賛意を示した
のか（正しいと信じたのか）を検証する」——レポートや論文を書く際に、有効な
複数の視点を提供してくれる。「この業界を志望しているのは本当に正解なのかと思
案する」or「どうしてこの業界を良いと感じているのかを思案する」——就活準備
の引き出しを増やしてくれる。「あの人が怒るのは不当だと証明する」or「なぜ自分

は不当だと思っているのかをよく考えてみる」——問いのたて方によって、他人に対する態度が変わるかもしれない……。

ここで、エッセイの冒頭に戻ろう。「この〇〇は本当に自分の好きなこと・人か、向いていること・人か」という問題を提示していた。今ではこの問いを次のように変換できるだろう。「本当に好きか否かはともかく、今の自分は好きで向いていると思っている。では、なぜそう思うのだろうか」。対象の真偽に関わる問いと、自己分析に関わる問い。二つの観点から考えることができる。

「真」を問うのか、それとも「信」を問うのか、という相違する問いの方法は、多様な事象に応用可能であり、同じことに対して異なる見方を提供することができる。哲学の方法を学ぶことで、学生生活、人生、現実における選択肢が増え、その厚みが増すのではなからうか。

【注】

- (1) デカルトはこの問いを進めて、真理（結論）に辿り着いたと主張している。興味がある人は、下記『世界の名著 デカルト』所収の「方法序説」を読んでみることをお勧めする。
- (2) フッサールはこの後、どのように自らの問いを推し進めたのか。その著作を読み通すことはかなり難しい。興味がある人にお勧めなのは、竹田（1989）である。フッサール哲学の核心が「『確信の条件』を確かめること」（竹田 1989: 41）である点を明解に示している。フッサール哲学から何を讀みとるのかについては論者によってかなり異なるが、本エッセイは、竹田（1989）の解釈に大きな影響を受けている。

【文献】

- 竹田青嗣, 1989, 『現象学入門』NHKブックス。
デカルト, 1978, 井上庄七・森啓訳「省察」, 野田又夫編『世界の名著 デカルト』中央公論社, 「省察」と略記。
ハイデガー, 1994, 川原栄峰訳『形而上学入門』平凡社, 「入門」と略記。
フッサール, 1980, 細谷恒夫訳「ヨーロッパの学問の危機と先験的現象学」, 細谷恒夫編『世界の名著 プレンダーノ フッサール』中央公論社, 「危機」と略記。
ユニバーサル・スタジオ・ジャパン (USJ) HP, (<https://www.usj.co.jp/web/ja/jp/events/kimetsu-2021>; 2021/8/16閲覧)。